

## 「ミッション・スクールで教えること、学ぶこと」

三浦 雅弘

全学共通カリキュラムの一翼を担う人文科学教育研究室では、毎年公開ワークショップを開催し、本学の人文教育の現実やその目指すものを参加者の間で共有しつつ、検討を加えてきた。今年度は去る2003年7月19日に、「ミッション・スクールで教えること、学ぶこと」と題して実施したので、その内容をここに報告したい。

大学改革の声が喧しい近年、全学的な「グランド・デザイン」を眺望するためにも、本学創立の理念に立ち戻ることは不可欠な要請であろう。その点を勘案し、今回のワークショップは、「ミッション・スクール」としての出自をもつ本学における、「キリスト教教育」の再考を主題とした。パネリストには、本学文学部キリスト教学科助教授の梅澤弓子氏（担当科目は「キリスト教思想演習」）、本学兼任講師の堀越喜晴氏（担当科目は「キリスト教と諸思想」）、そして同じく本学兼任講師の宮野升宏氏（担当科目は「諸宗教と思想」）の3名をお迎えした。仏教がご専門の宮野氏を煩わせたのは、キリ

スト教からの考察を相対化する視点も必要と考えたからである。

最初に話題を提供していただいた梅澤氏は、本年度は「自死」を主題とされたという演習形式のクラスの模様を報告された。演習形式の少人数クラスには、共同体としての「教会」の形成にも通じる意義が見出されるという梅澤氏は、まず本ワークショップのキーワードである「ミッション」の意味するところから説き起こされた。英和辞典をひもとくかぎりでは、「ミッション」という語には、任務、職務、使命、天職、使節、伝道、布教といった訳語が当てられているが、キリスト教においては、「キリスト教精神に基づく人格の陶冶」という意味が込められている。「統治」や「統制」でなく、「陶冶」であるところに、共同体という場の性質が反映されている、という。人格の修練に、到達されるべき「正解」のごときものがあるわけではないが、だからといって相対主義でよいことにはならない。「キリスト教精神に基づく人格の陶冶」には、「キリ

スト教的に生きる姿勢」が前提とされている。その「姿勢」を貫くのは共同体形成への意志であり、本年度の演習のテーマとされた、「なぜ他者の自死を考えねばならないのか」という問いもまた、「なぜ社会形成に参加せねばならないのか」という問いの一部にはかならない。その問いかけに対する応答のひとつが、キリスト教的人間観を背景とするそれなのである。ときに本学創立時の歴史に遡りながら、梅澤氏には本ワークショップの主題についての明快な見通しをご提供いただいたように思う。

2番手の堀越氏は、柔らかなユーモアの衣をかぶせながらも、本学の学生たちの優しさ、思いやりの欠如を冒頭から厳しく指摘された。視覚のご不自由な氏が教室に着かれるまでの途上において、学生から自発的なサポートを受けたことがこれまでに一度もない、というお話はショッキングだった。その一事をもってしても、本学におけるキリスト教教育の再点検の必要は明らかではないだろうか。「宗教 (religion)」の語源に当たる「レリギオ」には、「関係の回復」という意味がある。「ミッション」の語源の「ミッシオ」とは、その関係回復のために遣わされることを指す。氏の主張は、教室でいかにして関係を回復して行くか、の処方箋であったように思われる。

氏によれば、今日の学生たちは、人

やものごとや世界との関わりあい方を学んでいない。一言にすれば、彼らは「関わり障害者」であって、この患いは視覚「障害」よりも重篤である。その考えられる病因としては、成長過程での「とっくみあい」の欠如や、歴史についての無知、とりわけ歴史を体感していないことなどが挙げられた。

では、「関わり障害」はいかにして治療可能なのか。氏によればその根治策は、「声をかけようとする熱情」の育成であるという。氏はご講義で、『ナルニア国ものがたり』で名高いC.S.ルイスの書いたものを取りあげておいでであるが、そのルイスが第二次世界大戦中の1943年に発表したエッセイに、「人間の廃絶」と題されたものがある。それはその当時の英国における公教育において、「感情」を育てていないことへの警鐘という意味をもつものであった。ルイス自身は、「タオ」に照らした「感情教育」の必要性、ということを行っているそうであるが、堀越氏によれば、それはつまり本能と知性の調和、を指しているという。ミッション・スクールとしての本学は、「神」という言葉を堂々と口にできることの素晴らしさを忘れてはならない、という氏の最後のご指摘が印象的であった。

最後に、仏教がご専門の宮野氏より、先のお2人とは別の角度からご提題いただいた。氏からは、仏教の根底に流

れながらも、キリスト教をはじめ他の諸宗教にも通ずる基礎的理念について、数多くのことをご教示いただいたように思う。

仏教でいわれる「修行」とは、「真の自己を実現するために、自らの行いを正し修めること」を意味するが、サンスクリットの原義に遡ると、「反復繰り返しによって行いを身につけ、自らをあらわす」という語義であるとされる。この、日々の生活を通して人格の変容をはかるという実践は、ただ仏教のみにあてはまるのではなく、むしろ宗教一般に期待される役割ではないか。

例えば、実際に踏まれるべき修行の手段のひとつとされる「戒」とは、それを繰り返し遵守し、半ば習慣化することによって得た潜在的な力を、自発的に悪を離れる精神力へと高めることを目的とするが、その最終的な到達目標は、西洋的な「徳 (virtue)」に極めて近似する。より具体的には、大乘仏教でいう「十善戒」は、キリスト教でいわれる「十戒」とほぼ同じ内容である、という。

さらに宮野氏は、ホワイトヘッドを採用され、宗教が真正のものであるための指標を挙げられた。そのひとつは、「科学的な知に矛盾しないこと」であり、もうひとつは、「倫理的な直観に堪えうること」である。後者でいわれる「直観」とは、「ある価値観を受け入れる能力」とであると説明されたが、

そのような能力の練成、すなわち、「心を育てる」ことの重要性が氏の最後のご指摘であった。人文教育にいま求められているのは、「心についての知識を教える」ことではなく、「心を育てる」ことだというのである。このご指摘は、「ミッション・スクールで教えること」を標題の一部とした今回のワークショップにとって、極めて示唆的であったように思われる。

3人のパネリストのお話は、期せずしてひとつの収束点を得たのではないか。堀越氏は「感情教育」といわれ、宮野氏は「心を育てる」といわれたが、たとえ表現は異なっても、それらの指すものは同じであろう。そしてその方法論として、梅澤氏のいわれた「共同体の形成を通しての人格の陶冶」、つまり、共同体の形成を目指して行くことが、とりもなおさず「人格の陶冶」であるような人文教育、あるいは日々の教室での実践というものを考えることができるのではないか。

ワークショップはその後、パネリストおよび聴講者による自由討議に移った。約20名の参加者には、本学の専任・兼任の教員のほか、卒業生や学部生の姿もあり、さまざまな意見が寄せられた。現在の立教大学は、そもそも「ミッション・スクール」と呼ばれるだけの内実を備えているのか、というラディカルな疑問の声も挙げられた。

確かに、日ごろ学生たちに尋ねてみても、立教学院の宗旨を正確に答えられる者はほとんどいない。キリスト教を思わせるものは、建物としてのチャペルのみで、だから居心地がいいのだ、と話す学生もこれまで2、3ではなかった。

参加者の意義深いご意見の数々については、私の誤解・曲解のおそれがなきにしもあらずなので、ここにご紹介することは控え、私がおりにふれて思うことなどを最後に書かせていただこうと思う。私自身、カトリックの大学の出身で、その大学の宗教色の強さ（例えば、コミュニズムに対する教員たちの嫌悪にはたびたび驚かされた覚えがある）を思い起こすと、本学はいたってキリスト教色がうすい。しかし、大学をはじめとする教育機関、特に私学においては、その創立時の理念というものは常に想起される必要があるように思われる。それはとりわけ大学が自らの進路を再考するとき求められ、いまがそのようなときであることは自明ではないだろうか。その意味で私は、私自身の信仰の有無は別として、新学部や新学科等の設立が目指されるときには、その学部や学科が担う学問とキリスト教との関連は常に問われるべきであると思うし、かつて必修でありながらいまは科目名としてすら存在していない「キリスト教倫理」を、そのなかに生命倫理や環境倫理を包含する形で必修科目として復活させるべき

だと考えている。しかし、この後者の意見については、今回のワークショップでの自由討議の場においても、キリスト教学の方からも反対意見があったことは申し添えておかねばならないかもしれない。

みうら まさひろ

（本学社会学部教授、  
全カリ運営センター人文科学教育研究室主任）